

平成 29 年度 栗駒山火山防災協議会幹事会 討議概要

1 日 時 平成 29 年 7 月 12 日（水） 15 : 30 ～ 17 : 00

2 場 所 かんぼの宿一関 3 階コミュニティルーム

3 参集者 別添出席者名簿のとおり

4 次第

1. 開会
2. 挨拶
3. 協議
 - (1) 栗駒山火山防災協議会規約の一部改正について
 - (2) 栗駒山の火山活動状況について
 - (3) 平成 29 年度栗駒山火山防災に係る取組について
 - (4) 栗駒山火山ハザードマップ（マグマ噴火編）の作成方針について
 - (5) 平成 30 年度以降の栗駒山火山防災に係る取組について
4. 閉会

5 討議概要

(1) 栗駒山火山防災協議会規約の一部改正について

- ・ 質疑なし。

(2) 栗駒山の火山活動状況について

- ・ 静穏な状態で経過しており、ゼツタ沢の噴気等に異常は認められていない（仙台管区气象台 長谷川委員）。
- ・ 機上観測の結果、噴気や融雪域の状況に特段の変化は認められていない（盛岡地方气象台 歳桃委員代理）。
- ・ 質疑なし。

(3) 平成 29 年度栗駒山火山防災に係る取組について

- ・ 合体版のハザードマップは、マグマ噴火のハザードマップの完成形が見えた時点で検討したい（事務局）。
- ・ 栗原市では、昨年度作成した水蒸気噴火のハザードマップの説明会を実施した。参加者からは、ハザードマップのみが出てしまうと風評被害が心配であるとの意見が多く出された。避難計画とセットで周知を図る必要があると考えている（栗原市 伊藤委員）。
- ・ 加えて、登山者や観光客への周知方法が課題との意見が出た。市でチラシを作成して観光施設等へ配布し、登山等の案内時に個別に登山者等へ周知することにとどめている状況である（栗原市 伊藤委員）。

- ・ いわかがみ平のレストハウスは、火山噴火時の避難施設として使われることになると思うが、耐久性の確認が必要と考えている。県と連携して検討したい（栗原市 伊藤委員）。
- ・ 一関市では、水蒸気噴火のハザードマップに関する説明会を厳美地区の行政区長、宿泊施設等の方々を対象に実施した。火山ガスの定期観測の必要性について意見が出された。ハザードマップは 100 部印刷し、温泉施設等に掲示をお願いした。現時点で掲示に関する問い合わせはない（一関市 佐藤委員）。
- ・ 質疑なし。

(4) 栗駒山火山ハザードマップ（マグマ噴火編）の作成方針について

- ・ 先日実施したヘリ調査等により、マグマ噴火の実態が少しずつではあるがあきらかになってきており、今後さらに調査・解析を進める必要がある。完全に噴火史を解明することは難しいが、できる限りの調査を実施したうえで、ハザードマップを作成したい（齋藤部会長）。
- ・ 昨年度の調査でマグマ噴火の火山灰を 2～3 層確認したが、噴出源が不明である。噴火地点の候補として、剣岳付近の 2 箇所火口の地形が考えられる。また、昭和湖付近の南東側の登山道沿いでマグマ噴火の火山灰を確認している（土井委員）。
- ・ ゼッタ沢周辺で新たに火砕流堆積物を確認した。今年度の主要な調査対象となる。堆積物は溶結しているように見え、堆積時に高温であった可能性がある（土井委員）。
- ・ 今年度の主要な調査内容は、新たに確認した降下火砕物及び火砕流堆積物の年代を確定させるとともに、化学分析等により給源を確定させることである。調査結果を総合的に解析し、マグマ噴火のハザードマップを作成するための火口位置、噴火規模、噴火様式等の前提条件を決めたい（土井委員）。
- ・ 火砕流の温度は推定できるのか（浜口委員）
- ・ 上位の火砕流が溶結している可能性があり、600 度よりは高いと考えている（土井委員）。
- ・ 火砕流は厚い堆積物だったのか（仙台管区气象台 長谷川委員）。
- ・ ゼッタ沢沿いの両岸に見える地形は火砕流が作っている可能性があり、それなりの厚さがあると考えている（土井委員）。

(5) 平成 30 年度以降の栗駒山火山防災に係る取組について

- ・ 平成 30 年度に噴火警戒レベルの設定および避難計画作成を実施予定である。平成 31 年度に地域防災計画の修正や防災マップを作成し、周知を図っていくことを予定している。防災マップの作成方針については、平成 31 年度に関係自治体で協議したいと考えている（事務局）。
- ・ 噴火シナリオは、今年度作成するのか（仙台管区气象台 長谷川委員）。
- ・ 今年度、ハザードマップとともに噴火シナリオの検討も進める予定である（事務局）。
- ・ 避難計画を作成するうえではレベルの設定が完了している必要があるため、平成 30 年度の早い時点で、噴火警戒レベルを設定しなくてはならない。スケジュールがややタイトではないか（仙台管区气象台 長谷川委員）。
- ・ 現状のスケジュール案はややタイトではある。自治体の費用負担等も課題であるため、その点もふまえて検討していきたい（事務局）。

- ・ 緊急時の救助に関する検討を進めるうえで、警察・消防・自衛隊の方に議論に加わっていただく必要があると考えている。これらの機関の方々に、作業部会レベルでの議論に加わってもらった方が良い。オブザーバ等のような形で参加が可能なのか。また、自衛隊で栗駒山における救助に関する検討は既に進めているのか（宮城県危機対策課 佐藤委員代理）。
- ・ 作業部会における検討の枠組みや検討項目については、今後協議が必要と考えている（事務局）。
- ・ 災害現地研究を進めており、秋田駒ヶ岳では実施している。ハザードマップがなければ実施できないため、栗駒山では未実施である。避難計画ができた段階で、計画を立てることが可能となる（陸上自衛隊 第21普通科連隊 佐藤委員代理）
- ・ 火山対処計画は逐次修正を図っている。自治体の避難計画に関する情報を得たうえで、今後は現地研究についても計画していきたい（陸上自衛隊 第22普通科連隊 坂口委員代理）。
- ・ 岩手山噴火危機の際、岩手山火山防災ガイドラインを作成した。これは、各噴火ステージにおける関係機関の役割を計画したものであり、栗駒山での検討の参考になると思う（齋藤部会長）。
- ・ 噴火時の泥流等の土砂災害対策については、磐井川流域の堰堤の考え方等も盛り込んでいく必要がある（岩手県砂防災害課 大久保委員）
- ・ 連携を密にしながら進めていきたい（事務局）。
- ・ ハザードマップの体裁について、情報が多くなると字が小さくなりがちである。「見える・読める・わかる・伝わる」ことに留意し、高齢者にもわかりやすいものを作成してほしい（岩手河川国道事務所 吉田委員）。
- ・ わかりやすい防災マップについても、研究しながら作成していきたい（事務局）。
- ・ 岩手山の噴火危機対応の経験をふまえると、横の組織の連携が非常に重要である（齋藤部会長）。
- ・ 岩手山の対応事例を、栗駒山にそのまま持ってくることは難しいと考えている。栗駒山の現状の観測体制は良くない。警戒レベルを上げる際には地震の回数を基準にするが、現状では小さい地震をとらえることができていないのではないかと（浜口委員）。
- ・ どのような活動になったら噴火するののかということについて、栗駒山では観測データがない。ベースとなる観測体制をどうするか、どのような基準でレベルが設定できるか、このあたりを含めて議論していく必要がある。噴火史もわかっていないので、この短期間で作成することは難題である（齋藤部会長）。
- ・ 観測体制の整備も含め、どこまでできるかを詰めながら、現時点でできることは進めなければならない（仙台管区气象台 長谷川委員）。
- ・ 一番の問題は、御嶽山や口永良部島等であったような見逃しである。今できる範囲で対応するという気象庁の姿勢は理解できる。事態の進展を各機関が把握しながら、警戒レベルに基づいた避難計画をどこまで定量的にできるのか（齋藤部会長）。
- ・ 栗駒山に関しては過去の経験が全くない状況ではあるが、どうしたら防災として有効か、ご意見をいただきながら進めたい（仙台管区气象台 長谷川委員）。
- ・ レベル1の状態での火山活動に何か異変があった際、規制等の対応を自治体が独自にとることが難しい状態にあり、気象庁のレベルが上がることを待つしかない。この

ことが適切な防災対応にマイナスになっていないか。岩手県では専門家も含めた独自の火山活動検討会を実施している。この点を自治体はどう考えているのか（齋藤部会長）。

- 気象台からの情報があつて、危険かどうかの判断に迷った場合には、登山道の入山禁止をすることを考えている。現実には気象台の情報を待つしかないと考えている（一関市 佐藤委員）。
- 噴火警戒レベル、避難計画、防災マップについては引き続き議論いただきながら作成していくしかない。今後取組み予定については、この案で進めていきたいが異論はないか（岩手県総合防災室 石川幹事長）。
- 異議なし。

以上